

神奈川県現代俳句協会会報

第154号
令和3年12月発行

題詠 花の一句

論争の火消しにまわる彼岸花

こはいかに吾が名知るぞや荻の声

花びらの密讚へらるシクラメン

売家や伸び放題の垣根萩

コスモスの裏へ少年かくれんぼ

俯きしクリスマスローズ冬深き

冬桜呼吸忘れてゐるやうな

ボヘミアングラスいっばい冬薔薇

絵心も詩心もなく寒牡丹

釣舟草内緒話のこぼれさう

寂聴の愛絢爛と冬紅葉

返り咲く花のコラボに紅葉燃ゆ

帰り花少し苦しきファルゼット

町野 敦子

猪狩 鳳保

安藤 靖

加藤 三眠

宮永 武彦

大山 賢太

関根 洋子

吉村 元明

金栗トモ子

杉 美春

田中 悦子

村上 裕也

なつはづき



(写真：村上 裕也)

ヒンドウのhighき割れ門蘭の花

コスモスのみどりなる影見つめをり

もののふの魂呼ぶやうに野紺菊

父愛でしふる里の花石路の花

皇帝ダリア二階からもの申す

扇 義人

佐藤 久

松浦 泰子

飯島 栄子

芳賀 陽子



◎神奈川県現代俳句協会創立40周年

記念俳句大会

日時 令和4年11月23日(祝)

会場 ワークピア横浜

〒231-0023 横浜市中区山下町24-1

記念講演 講師 中村 和弘 先生

(現代俳句協会会長・「陸」主宰)

会費

記念式典・講演会のみ参加 千円

記念祝賀会(記念式典・講演会を含む) 一万円

5年に一度の記念大会です。

会員、会友多くの皆様方のご参加を心よりお願い申し上げます。

トピックス

花の一句
結社だより
第38回神奈川県現代俳句協会入賞作品
諸家近詠
湾岸大賞のお知らせ
俳人交遊録
会員新刊案内
新しい風



【結社だより】 第六回

「響焰」 主宰 米田 規子 記

「響焰」は昭和33年に和知喜人が創刊。平成10年に山崎聰(現名誉主宰)が二代目の主宰を継承し、平成30年には創刊60周年を迎えた。そして令和2年に米田規子が三代目主宰を継承したばかりだ。

現在の「響焰」は昨年来のコロナ禍で句会の開催が難しかったため、ネット句会を立ち上げた。毎月大勢の同人、会員の参加があり、今は「響焰」の中心的句会となっている。

本来「響焰」の本部句会である東京句会とは、毎月第一月曜日に東京都江東区文化センターで開かれる。その他、栃木、千葉、東京、埼玉、神奈川県に地域句会がある。因みに神奈川の横浜句会とは毎月第四土曜日に男女共同参画センター横浜で行われている。

また、「響焰」の二大行事として、春の新樹会(日帰り)、秋の白秋会(1泊2日)が上げられる。その他、同人会員懇談会と新人合同研修会も毎年楽しみな行事だ。

「響焰」は「いろいろな色の花束である」と云われてきたように、それぞれの個性を大切にしながら詩としての俳句を探索している。それ故に句会は自由な雰囲気での意見交換が盛んに行われる。この先は皆が顔を合わせる大吟行会の開催実現を心待ちにしている。

連絡先……米田規子 〒2445・0015

横浜市泉区中田西三―三五―一六

電話・FAX 045(802)7917

詳細はHP(kyouden2.sakura.ne.jp)参照のこと

第三十八回 神奈川県現代俳句協会俳句大会

募集 句 入 賞 作 品

- | | | |
|-----|----------------------------------|--------|
| 1位 | 神奈川県現代俳句協会賞
いつか捨てたボクが枯野で生きていた | 山本 敏倅 |
| 2位 | 神奈川県知事賞
天寿までまだ間のありて平泳ぎ | 田畑ヒロ子 |
| 3位 | 神奈川県議会議長賞
蝸やいつかひとりになるふたり | 佐藤 久 |
| 4位 | 神奈川県教育委員会教育長賞
露草やいつも涙はあたらしい | 衣川 次郎 |
| 5位 | t v k賞
誰も知らない鳥雲に入りしあと | 栗原かつ代 |
| 6位 | 横浜俳話会賞
海をみるだけのちいさい秋である | 平田 薫 |
| 7位 | 鳥雲にひとは水辺に寄りたがる | 高木 暢夫 |
| 8位 | 句読点どこに打とうか春の川 | 町野 敦子 |
| 9位 | ピーマン赤くなりいつからか他人 | 中尾 美琳 |
| 10位 | 語らねば褪せる日の丸終戦日 | 守屋茂々子 |
| 11位 | 鋭角の西瓜はなしをまるくする | 芳賀 陽子 |
| 12位 | 秋燈ひとつは偲ぶため点す | 里見 美季 |
| 13位 | ただ海を眺めていたい沖繩忌 | 田中 悦子 |
| 14位 | 走馬灯時間は流線形で来る | 麻生 明 |
| 15位 | 花は葉を一度も知らず曼珠沙華 | 萩原 陽里 |
| 16位 | 晩年のすきま隙間に水を打つ | 西田みつお |
| 17位 | 記憶にも源流のあり梨をむく | ※里見 美季 |
| 18位 | ふところに花野の空気持ち帰る | 菅沼 葉二 |
| 19位 | 木枯しときよならするための切手 | ※栗原かつ代 |
| 20位 | 昼寝覚め出口で猿とすれ違う | ※田畑ヒロ子 |
| 21位 | 一行の日記のやうな夏終る | 関戸 信治 |
| 22位 | 睡蓮の上を向くしかない自由 | 宇佐見輝子 |
| 23位 | 冬晴や機影は銀のナイフほど | 植田いく子 |
| 24位 | 竹皮を脱ぐ青年の耳ゆたか | 八城 湖楊 |
| 25位 | それぞれに夕焼け背負ひ下校の子 | 神野 重子 |
| 26位 | 海に吹かれて八月のあかんぼう | 大澤 秀子 |
| 27位 | お袋のいつも無敵の昼寝かな | ※西田みつを |
| 28位 | 世に格差滝に落差の響きあり | 中村 昌男 |
| 29位 | 飛び込めば少年は鮎甲斐の国 | 長谷川昭放 |
| 30位 | 逃亡を謀りし木より雪吊す | ※関戸 信治 |
| 31位 | 水打って路地を切絵の江戸にする | ※山本 敏倅 |
| 32位 | これはもうセクハラですと桃が言う | 尾崎 竹詩 |
| 33位 | 内藤ちよみ | |

新会員紹介欄

- 高野山 柴土 一廣 (朱夏)
- 若竹の坊に声明山揺るる
五月雨や御廟の灯り瞬がず
吾が骨は高野へはふれ白木蓮
- レノンの忌 佐野 笑子 (青岬)
- 長針の速過ぎないかレノンの忌
訪問医師もう来る頃か北塞ぐ
母の背に人生語る二日灸
- 行秋 扇 義人 (天為)
- 行く秋や恋占はもう要らぬ
秋寒やライ麦パンに齒の立たず
増殖するカタカナ用語そぞろ寒

諸家近詠

(到着順)

偏屈 潮 仲人(麦・轍)

老いて耳聴くなりしや秋の声
直売の偏屈さうな南瓜買ふ
生意気な餓鬼のゐた村豊の秋
美術展寄らずに帰るパンダみて

枯木 市川めぐみ(顔)

冬の蝶風と遊べば明日がある
忘れ癖笑われており返り花
玉子酒争いいつか解けており
怒るまい枯木静かに立っている

三枚目 伊藤 眠(雲)

賞罰の無きを誇りし端居かな
たをやかに生きゐてひとり星祭
ひらり来しかげろふ影をもたざりき
新蕎麦をすすりて楽し三枚目

雪 岩城 庸子(顔)

静寂をかたちにするれば真夜の雪
卸取れそう空から雪の零れそう
冬蝶はエロスの神と眠りたる
原点に戻る安けさ裸木よ

赤カンナ 植田いく子(山河)

見取図の中を出られぬ秋の風
空井戸を覗いた方が赤カンナ
テラーの木製ハンガー秋日濃し
積木崩すみたいに葡萄食べている

紅葉山 大山 賢太(海原・鷗座・夢)

どら猫がくわえて逃げ行く翹雲
たまちゃん頭は頭にひとつ牛膝
秋彼岸「お迎えに来た」と外の声
紅葉山バンビはシカトしてをりぬ

関東煮 日置 正次(玄鳥)

橋の名は暗記できて都鳥
神の留守肩に重たき空がある
関東煮免疫力を高めたし
三密を避ける目隠し福笑い

力任せ 瓜田 紀子(岳)

フェルメールの絵の疲れをり夏の果
産土を向きて鳴く八月の蟬
颱風禍力任せに生きて来し
絶え間なく流星山の巨樹斃る

ぼくのともだち 石川 夏山(麦・楽園)

カピバラに幸せを聞く冬日和人
人恋しいか駐車場に鹿の糞
大晦日王子稲荷へ狐ゆえ
オリオンに憧れチャボは羽ばたけり

寒夕焼 伊藤 梢(鹵車)

紫蘇の実や風の呼び声遠くから
花野とは彼の世へ続く入口
三つ目の扉開ければ冬銀河
寒夕焼永遠の世界に浮ぶ富士

アフガン 江原 文(小熊座)

いくたびの戦禍ぐぐりし毛布抱く
実柘榴や身ごもりし母国追はれ
死者数多みな名のありていなびかり
銃を持つ手より勝る手棉を摘む

🎁受賞おめでとうございます！🎁

第6回攝津幸彦記念賞 逸賞 なつはづきさん

一杯のコップの水となる新樹
それぞれの深さで眠る水の秋
門番がゴシック体で告げる冬

禿頭 麻生 明(海鳥)

本能が闇に融けだすかぶと虫
太陽の尾がからまつて夕焼ける
入梅やネガで見ている顎の骨
自転車の禿頭炎天駆け抜ける

浅見 良男(青岬)

農三分俳句も三分あとはおぼろ
梅雨明けの森に畑に匂を拾ふ
人生の余白紡ぎて芋を植う
梅雨空を倦まず憎まず畑巡る

安心・安全 岩田 信(無所属)

冷蔵庫いつも平和と生野菜
掌の安心安全そぞろ寒
彼岸花まわりの海がきな臭い
手探りのCOVID-19羽脱鶏

夏怒濤 石井 眞(波)

断崖にためらひ見せぬ滝の水
万緑を人は火をもて侵略す
熱帯夜得体の知れぬもの生まる
夏怒濤大和島根の根危ふし

四方の峰 内田ゆり子(草樹)

啓蟄の光あふるる盆地かな
四方の峰甲斐の植田もあををと
青臭さ残る藁塚夕茜
大寒や何も羽織らず月仰ぐ

[神奈川県現代俳句協会創立40周年記念《湾岸大賞》作品募集]

創立40周年の記念事業の一つとして、会員の優れた作品を顕彰する為に「湾岸大賞」を募集することに致しました。清新で現代俳句として残せる意欲ある作品の応募を期待いたします。

募集規定

- 1 神奈川県現代俳句協会会員及び会友の作品であること。(選考委員は除く)
- 2 20句未発表であること。
- 3 A4 400字詰原稿用紙使用、右欄外に題名を記すこと。
- 4 別紙に氏名・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記すこと。
- 5 参加費 2000円を作品に同封のこと。
- 6 締切 令和4年2月末日(消印有効)

入選発表

令和4年9月神奈川県現代俳句協会会報に発表

顕賞

令和4年の創立40周年記念大会席上にて湾岸大賞受賞者には賞状と賞金5万円、準賞者には賞状と賞金3万円を贈る。

選考委員(一部交渉中)

東京都現代俳句協会会長 多摩地区現代俳句協会会長 千葉県現代俳句協会会長
神奈川県現代俳句協会特別顧問 森田緑郎
神奈川県現代俳句協会名誉会長 吉田 功
神奈川県現代俳句協会々長 尾崎竹詩
記念事業推進委員長 内藤ちよみ
記念事業推進副委員長 伊藤 眠・大本 尚・田中悦子・田畑ヒロ子
神奈川県現代俳句協会顧問(アイウエオ順)
朝広純子・綾野南志・荻田礼子・川村研治・川村智香子・酒井弘司・佐々木英子
鈴木和代・瀬戸美代子・佃 悦夫・中岡昌太・西野洋司

投句先

湾岸大賞事務局 渡辺和弘

創立40周年記念事業実行委員会

俳句研究会報告

西部俳句研究会

伊藤 梢 報

於・明治市民センター

第二八二回

令和3年5月29日

一徹を貫き通す青胡桃

能面の俯き加減梅雨くるか

夢を見しアカシアの花咲きにけり

何事か話す風情や鉄線花

新緑の光纏いて吾子の歩み

山法師かぜの嗚咽か琵琶の音か

直立のグラジオラスに一步引く

喉元に来 夏飛燕や改憲や

レース着てフランスパンを買いにゆく

黙示録ラムネの玉が塞ぎおり

卯波立つ島の洞窟入り難し

美しき嘘聴きたくて薔薇の園

日本霊歌 蝮姑蝮姑蝮姑 ケラ遁走

春陰マスクして半分自分でない安堵

難民にモーゼいつ来るロヒンギヤ夏

薔薇の香や母の愛せしマダムロシヤス

城壁の白あざやかに夏来る

木の香漂ふ尼観音に乳房なし

太陽を信じておりぬ立葵

第二八五回

令和3年9月25日

星々に鞆吊られ島の秋

身の内に白曼珠沙華ほほゑみて

しんがりの枯葉どこかがきな臭い

友送る車の窓の星月夜

野ねずみの育児じゃがいも畝の中

見納めの浮世の月は家で見る

連山へ香を立てているや金木屋

転轍機下され列車枯野へと
人間に戻りそこねて蛇穴に
色のない風に素直になる記憶
一片の雲も見えずに月上る
枝豆や大言壮語の漢かな

秋風や洗ひざらしのぬひぐるみ

至福かな耳鼻咽喉目の憩ふ秋

稲雀翻筋斗打って地に墮ちん

猫じゃらしどんな風とも仲良しで

第二八六回

令和3年10月30日

逝く時はどうせ手ぶらや日の短か

余生大事陽の陰りある木守柿

晩秋の貨物列車になりに行く

石路咲いてこの明るさにある暗さ

枝打ちて隙間の向こう何ぞ住む

菊香るタイトルホルダー五馬身差

眼差しの奥に居座る黄落期

寝返りをまた打つ露の夜の柩

藪揺るるまだ咲き残る紅小萩

一葉落つ最後の伝言サラリ言う

捨て案山子バラマキ公約聞き捨てる

焼き芋を包む原発の新聞紙に

無花果割る秘め事のほのかに紅し

つぎはぎの土器の輝く文化の日

荒波の映る眼の瘦せ秋刀魚

駅出でて一足ごとの夜寒かな

松茸やきれいな嘘を跨ぎおり

差しかけし傘の内まで夕時雨

後朝の如く散るかな秋桜

黄落や友の大半地下に逝く

秋思かな楠の大樹を仰ぎつつ

◎連絡先…渡辺正剛

俳人交遊録

第七回

森田緑郎さんのこと

瀬戸 美代子

昭和五十七年十月、神奈川県現代俳句協会は「神奈川県協賛会」の名称で呱呱の声をあげた。

その準備会に森田緑郎さんとの出会いがあり、以来のお付き合いは協会と同じかれこれ四十年と言うことになるのか。どちらかと言えば寡黙なかたで当初の頃は幹事会などで必要な部分のみのお付き合いであったかも知れない。昭和六十三年発行の俳句研究別冊の現代俳句辞典に依れば、森田さんは「第五回海程賞受賞」。『句集花冠』『森田緑郎句集』『海程句集』。

(遙かなるものは肉体の中にある。時々刻々の生、時間の流れを積極的に俳句へ) 秩父駅頭あれが月下の柱かな」と記載の項があり、その頃から一嘉言を持たれる作家であった。

平成五年十一月の神奈川県俳句大会では、「仰臥漫録の周辺」と題する子規についての蘊蓄のある講話をされている。平成十五年、田中不鳴さんのあと会長の席につかれ以降十年、二十五年に名誉会長に選ばれた。その間私も会計、事務局長、副会長を担当、接触の機も多くなり、吟行会、大会時の選評などをご一緒した折、選出した句に時をかけ、まっ黒に書き込んだ句稿を携え講評に臨まれるのに感心したものだ。

私共の「顔」とも昵懇の関係で、四十周年、四十五周年、五十周年の記念号に特別寄稿を願って花を添えて頂いた。慎重に時間をかけて下さったエピソードの思い出もある。お祝いに銘酒を送って下さる優しいお心遣いも頂いた。

昨今、体調がすぐれられないのが気になるが、大事にされて今後もご活躍を希っている。

第三八二回 令和3年10月9日 岩田 信 報

兼題「都」

放屁虫一身上の都合です
 孫と割る胡桃染色体に似て
 ぼつねんと鬱の案山子のいる都
 さくら紅葉はらり静の舞うや古都
 都路の水切る音も愁思なる
 大川や連れの都々逸聞く夜寒
 この世揺れわれも遊子か草の絮
 秋の蚊や都宮線より乗り入れる
 初冠雪阿夫利嶺はずつと青年
 老いたれば田作の齒軋りなめくじり
 夜の浅蜷厨ぶつぶつ都落ち
 大都会一人一夜のぬくめ酒
 第三八三回 令和3年11月13日 吉村 元明 報

兼題「途」
 熱爛や鬼から虎になる途中
 黄落を浴びたる途端ノラになる
 吾亦紅途切れぬように足すことば
 卒寿には卒寿の前途冬木立
 風神が袋かまえる黄落期
 立冬の飛行雲の尾にイカロス
 球界に婆沙羅現わる冬ぬくし
 稲の香のまっただ中に途中下車
 菊咲いて前途多難を行く二人
 菊香る一途な恋のものがたり
 夕星やマスク疲れの耳朶をもむ
 大根の途方にくれる太さかな
 ハロウインのかぼちゃ笑顔や黙食す
 鳩時計不整脈かな今朝の冬
 次回兼題「熱」(12月18日)
 ◎連絡先…吉村元明

ブロック短信

横浜ブロック星川句会

なつ はづき 報

十月(令和3年10月4日)

口の立つ九官鳥や秋の昼
 除菌の手ひよんの実鳴らし私語禁止
 この道は妻と歩んだ秋夕焼
 障子に映るかまきりの影踊り
 誤作動を起こすロボット鳴高音
 生き延びて満月に背を押されたる
 倒木の立ち上がりさう月明り
 十一月(令和3年11月1日)
 だれもぬぬブランコ揺れて秋の暮
 冬の雷電光板に核のこと
 手つき良き若き男の鍋奉行
 その雲早くどいてよ十三夜
 雲降る終りはいつも突然に
 約束は光り出すもの石露の花
 空箱は秋の夕陽に開けてある

◎毎月第一月曜日
 相鉄線星川駅下車「かるがも」(保土ヶ谷区福祉
 保健活動拠点)もしくは「アワーズ」(ほどがや
 市民活動センター)で行います。
 1月(10日) 2月、3月は「かるがも」で行いま
 す。初めてご参加の方はお問合せ下さい。
 連絡先…なつはづき

西部ブロック丹沢句会
 長谷川 昭放 報
 八月句会(順不同・於 堀川公民館)
 朝毎に朝顔の青深くなり 飯田美枝子

星月夜足裏で掴む大砂丘
 海までの柱状節理秋入り日
 空っぽの脳をスイカで満たしおく
 待ちきれず黄色いままにアキアカネ
 折袴師に戦死の声聞く極暑かな
 奪衣婆に先ずは挨拶闇魔参り
 星月夜ラピスラズリの在り処
 蓮の実が跳んでだあれもいなくなる
 ファイヤーの円のくずれや星月夜
 あきあわせちよいとかせいまでお買い物
 炎昼や地獄の門が半開き
 九月句会(順不同・於 堀川公民館)

北村 文江
 澁谷 徹
 加藤かほる
 羽田 勝二
 田畑ヒロ子
 佐々木重満
 加藤 三眠
 尾崎 竹詩
 酒井 敏光
 與 起
 長谷川昭放
 二上 貴夫
 尾崎 竹詩
 加藤かほる
 菅沼とき子
 與 起
 佐々木重満
 田畑ヒロ子
 羽田 勝二
 飯田美枝子
 中尾 美琳
 加藤 三眠
 北村 文江
 澁谷 徹
 佃 悦夫
 長谷川昭放
 立石 采佳
 二上 貴夫
 竹村 半掃
 田畑ヒロ子
 羽田 勝二

孫の手は行方不明に虫すだく
 カボスとへバスどれだけ違ふスタチかな
 不特定多数は無言秋乾き
 秋の陽にコップ透かしてまた磨く
 渡り鳥高千穂越えてなお遠く

十月句会(順不同・於 堀川公民館)

通せんぼしても通る禍身に沁むや
極楽に九品蓮の実一つ飛ぶ
美しき翅横たわる霧の朝
天高し帽子ちよっぴりあみだにし
夏帽子東夷の固有種だと
草モミジロと丘書キ違エ
探し物はまだ見つからず穴惑い
それぞれを個性といえは榎櫃の実
零余子蔓五体欠けゆく手前かな
グリとグラいそうな森の栗拾う
人間が芥子粒となる鷹柱

北村 文江
菅沼とき子
加藤 三眼
足助 泰彦
佃 悦夫
興 起
加藤かほる
芳賀 陽子
佐々木重満
内藤ちよみ
長谷川昭放

◎11月より句会場が西公民館に変更になりました。
ご注意下さい、小田急線渋沢駅より徒歩7分です。
◎連絡先・長谷川昭放

川崎ブロック

山田 ひかる 報

於・川崎市総合自治会館

九月句会

9月18日(土)

干柿の粉をはたいて銀歯の笑み
捨て置いた俳句見直す良夜かな
大方は消えてしまった赤のまま
児の描く手形紅葉の実物大
茶柱がいくつも立ちて厄日かな
鳥渡る上りホームにある足湯
朝風呂や林檎をひとつ胸の内
八月や大黒柱の黒光り
二十世紀遠くなりしよ梨もまた
宮大工の小指しなやか鳥渡る

麻生 明
石川 夏山
加賀田せん翠
佐藤 廣枝
菅原 若水
関戸 信治
ダイゴ鉄哉
花澤ちいこ
吉居 珪子
山田ひかる

草紅葉鉦山爆発試験場
長き夜を分け合っており焼むすび
秋の夜地震の揺さぶる記憶かな
おる抜き大根あなた任せの運不運
雀蛤となり神人となる
散髪のシニア割引罽雲
いるはに穂棚田波うつ出雲崎
躁鬱の境目夜の萩すすき
恋敵夫婦で演ず村芝居
突っかけの歩き出したる良夜かな
時を打つ時計の無くて夜長かな
柘榴裂け地球壊れる音がする
ペンを手にひとりの良夜飴しやぶる

麻生 明
加賀田せん翠
川島由美子
佐藤 廣枝
菅原 若水
関戸 信治
ダイゴ鉄哉
山老 成子
西田みつを
花澤ちいこ
三沢 容一
吉居 珪子
山田ひかる

湘南ブロック

堀口 みゆき 報

藤沢市民活動推進センター二階会議室

第73回サンシャイン句会

9月3日(金)

当季雑詠5句(うち席題一句「原」)
髪洗ふ考へ直すことありて
昔は田今は大きな花野原
ジンジャーの花白々と秋の雨
秋の日に全身光るバラ選手
鳥獣の半歩先き読み無花果採る
背高泡立草期待もされず天を突く
黙祷は詔勅聞けり終戦日
かなかなのこ多嬉しくも哀しくも

安藤 靖
大山 賢太
荻野 樹美
金栗トモ子
佐々木重満
田畑ヒロ子
渡辺 正剛
堀口みゆき

※台風のため、日時が変更になりました。

第74回サンシャイン句会

10月15日(金)

当季雑詠5句(うち席題一句「八」)
家系図の枝分かれて吾亦紅
稲光小犬は隅で丸くなる
秋の声丘ひるがえる信号旗
稲光振払いつつ救急車
診察券束ねるほどに秋暑し
友の死は吾が死と思ふ温め酒
脱けさうな空鹿の眼の餌を乞ふ

安藤 靖
大山 賢太
荻野 樹美
保里よし枝
馬来まち子
渡辺 正剛
堀口みゆき

第75回サンシャイン句会

11月5日(金)

当季雑詠5句(うち席題一句「使」)
秋深し記念硬貨を使うかな
使えない化石燃料文化の日
穂芒や使い勝手の悪き筆
手品師の帽子から鳩秋澄めり
青空を全部使って柿を挽ぐ
ハロウインのかぼちやの笑顔黙食す

大山 賢太
荻野 樹美
芳賀 陽子
堀口みゆき
山口 愛子
渡辺 正剛

十月句会

10月16日(土)

青島 哲夫

◎毎月第三土曜日の午後一時から四時頃迄、川崎市総合自治会館四階(武蔵小杉駅徒歩二分)で実施しています。雑詠五句(内兼題一句)です。
◎連絡先・加賀田せん翠

◎毎月第一金曜日14時〜17時。会場は藤沢市民活

動推進センター二階会議室。

◎湘南ブロック吟行会はコロナ禍のため未定です。

◎連絡先：堀口みゆき

夏雲句会（インターネット句会）

宮永 武彦 報

八月

青胡桃 秘密の部屋を改造中
かなかなや空は自由といふ墓域
洞窟の奥の奥へと八月の青
キビ畑ザワザワと不発弾
水引の花 循環小数の並び
青蔦が丸ごと包む一軒家
炎昼の錆びし鉄棒遠き声
本能が融け込む闇のかぶと虫
わが魂茄子の馬に乗りたがる
秋の昼紅茶の好きなテロリスト
花芙蓉動線分ける病棟の
アルプスに滑落の史や花水
水脈が水脈曳き秋水の船消ゆる
花火の夜父の楽しむ顔が好き
睡蓮の池へ溶けゆく星屑よ

九月

秋めくや水の記憶は風が消し
衣被痛いところを突かれけり
鬼になる途中の彼女秋の宵
秋時雨地磁気静かに対流す
地球儀にふと目をやれば蚯蚓鳴く
秋暑し殻のはりつく茹卵
時ならぬ鯨漂着秋の雲
義理人情からむ集落葛の花
蓮の実の衝動遠くへ遠くへ

長谷川昭放
堀口みゆき
本田 詠遊
江原 文
佐々木重満
桐山 芽ぐ
石鎚 優
麻生 明
石川 夏山
菅原 若水
町野 敦子
渡辺 順子
佐野典比古
斉藤 祐子
宮永 武彦
菅原 若水
麻生 明
石川 夏山
佐野典比古
石鎚 優
江原 文
渡辺 順子
佐々木重満
長谷川昭放

十月

五里霧中下山は海に溺れるよう
キャンシユレスといえど月下の新紙幣
仙人掌のそれぞれの形秋の声
すくすくや日目の待つ命名の秋
甘藷掘りや土触れぬ吾悄然す
誰もぬぬ真昼の迷路秋薔薇

この国に数多風の名鱈干す
唇に残る麻酔や雁渡る
鳥葬も選択肢かな鷹渡る
都市の脳 閑かに冷ます蕎麦の花
長き夜の一つになれぬ四重奏
記憶濃くなる二度咲きの金木犀
神様の坐骨神経痛光り
天高し墓に映りし己が顔
道端に名も無き草の実を結び
夜空はパンドラの箱か賢治の忌
黄昏や秋の列車に波の音

桐山 芽ぐ
町野 敦子
堀口みゆき
本田 詠遊
斉藤 祐子
宮永 武彦
江原 文
桐山 芽ぐ
長谷川昭放
佐々木重満
町野 敦子
渡辺 順子
麻生 明
石鎚 優
多久島重宏
菅原 若水
宮永 武彦

◎インターネット（夏雲システム）で行っています。
毎月開催しています。
投句、選句、選評などすべてインターネット上で
行います。参加される方を是非お待ちしています。
ご希望の方は、宮永までメールをお願い致します。

【新設句会のお知らせ】

新たに二つの句会、「横浜南部句会」と「金八Z
OOM句会」がスタートしました！
皆様奮ってご参加ください。

横浜南部句会

十一月句会

尾澤 慧璃 報

横浜市社会教育コーナー研修室C

切れ易き糸を宥むる霜夜かな 川野ちくさ
檸檬一滴紅茶は呆けていかなかった 尾崎 竹詩
綿虫のいまにも毀れそうに密 里見 美季
中学生の屯す神社冬ざくら 池田恵美子
マルエツの股引穿きし大阿闍梨 鹿又 英一
晩秋の琥珀の底に沈む虫 杉 美春
電動のママチャリ飛ばす牛膝 芳賀 陽子
小春日や磨かれてる霊柩車 なつはづき
紅灯の街のしぐるる恋みくじ 佐藤 久
オリオンへ帰る途中の雪螢 内藤ちよみ
冬めくや蒲焼匂う裏通り 藤田 裕哉
目貼りしてわたしの国へ逃避行 関根 洋子
洋服の犬ある銀杏落葉かな 尾澤 慧璃

◎会場……横浜市社会教育コーナー研修室C
（JR磯子駅より徒歩4分）

◎日時 奇数月の第四水曜日 13時

◎連絡先 尾澤慧璃

金八句会（ZOOM句会）

ZOOMテスト句会 十月・十一月（ひとり一句）

練習の半紙バリバリ冬に入る 尾澤 慧璃
ポッケよりぼつと出されし烏瓜 中村 光男
詩人みな放浪の性芒原 扇 義人
輪郭の太き描線冬薔薇 佐藤 久
笹鳴や駆け込み寺の門固く なつはづき
栗の皮剥きたる妻の独り言 村上 裕也
人の世に出て来て糞する鹿の夜 石川 夏山
押印のどれも擦れて神の留守 杉 美春

◎ZOOMを使用して行います（事前投句）。

◎毎月第二金曜日 夜8時

◎連絡先 杉美春

【会員新刊紹介】

佃悦夫会長退任記念

「俳句の岸辺」(小田原俳句協会刊行)

発行者 池田忠山(会長)

佐々木重満 記

本書は小田原俳句協会会長退任を記念して発行したものである。

小田原俳句協会は毎年、梅まつり・桜まつり・文化祭俳句大会を主管しているが、昭和41年から協会報を毎月欠かさず発行(11月現在651号)。

その協会報に就任4年目の平成4年4月から平成30年8月まで断続的に「俳句の岸辺」寄稿してこられた。その数50編。これらの寄稿文を復刻掲載したものである。

佃氏は昭和63年に第四代会長に就任。以来、昭和・平成・令和を通じ令和2年3月まで32年間、氏の高潔な人格は句に対する志向も俳句観も異なる結社・G会員から厚い信頼を受け小田原俳句協会を牽引されてきました。

さて、寄稿文の内容は◎協会会員の句集の書評26編◎俳句文化の概観6編◎西湘俳人紹介4編◎講演録5編(分割掲載を含む)◎小田原の町の紹介4編◎エッセイ5編(筆者の独断による分類)である。

どの編も俳句誌「海程」の新人賞、海程賞そして現代俳句協会賞受賞歴の氏がオリジナルで独特な俳句観(筆者は佃ワールドという)を展開している。

俳句に真摯に向き合う佃ワールドが全編に滲み出ている。また、小田原在住の氏が、小田原周辺を軸に現代俳句を原作者の視点から述べておられる。

現代俳句史の一端までも読みとれる良書である。

松本隆男句集『季々の滴』(一粒書房)

なつはづき 記

句集と一緒に名刺を頂いた。工学博士、とある。確かに理系の視点が生かされていて面白い。

這ふ虫に座標あてがふ網戸かな
百億のニューロンとともに昼寝かな

1と0デジタルの道蟻の道

「蛩」とは「ホトン」と「モーター」を合はせしや
蛩の儂い運命を描くのに、ホトン(光子)やモーター(死ぬ運命)という、一読するとまるで何かの暗号のような無機質な響きの言葉を使う。

句集に三句ほど回文があったが、(きつと普段から沢山作っているのだろう)
流れ水野に来る国の董かな

柿喰ふて汚す息子よ手拭く気か

白の足袋履き豆撒きは飛驒の路地

回文と言われなければ解らない出来栄である。一方で、柔らかく抒情的な句にも心惹かれた。

鏡餅ゆたりと重き日暮かな

雛壇の陰より伸びる糸電話

すゞらんの傍は小声で通るべし

暖をとる傍らにチエロゆたり置く

乾ききらない艶が残る鏡餅だ。年末の忙しい時にそこだけゆったりと時が流れている。雛壇に隠れている子供との糸電話。でも、もしかしたら本当に古の雛がそこにいるのかもしれない。

氏にとって俳句は、坐禅とともに「精神的な疲れを軽減し、解放する」ものだという。

ゆく春や菩薩の思惟頰の指

夏坐禅煩惱無尽誓願断

人としての厳しさ生きにくさ、それがあからこそ森羅万象を愛する心が生まれる。今後の益々のご健吟を心よりお祈り申し上げます。

川名 大 『渡邊白泉の100句を読む』

『俳句と生涯』(飯塚書店)

杉 美春 記

新興俳句を研究対象としつつ、近代俳句の軌跡を俳句表現史の視点から構築してきた著者の最新刊。研究対象の作品をはじめ、一次資料が作品が作られた当時のまなざしで読み解くという方法を基本とし、安易に評伝などの二次的資料に頼らない、という立場で作品の構造分析をしてきた作者が、本書では「従来の方法と逆に、白泉の生涯を可能な限り具体的に詳細に調査し、それを効果的な補助線として俳句を読み解くという方法」を採っている。本書を読むことで、あまり知られていなかった白泉の生涯や、白泉の俳句観、特に「京大俳句」弾圧事件での検挙を契機に暗転した白泉の境涯と作品の変化、その作品の受容史などについて読者は知ることができる。

戦争が廊下の奥に立つてゐた (白泉)

今日の俳人で知らぬものがないほど有名な俳句だが、昭和十年代には受容度はそれほど高くなかったという。昭和四十年代になっても白泉は俳壇から忘れられたままで、四十四年一月三十日、一地方教師としてひっそりと亡くなった。白泉が俳壇的に復権したのは、三橋敏雄と高柳重信の二人の俳人の炯眼と尽力による、という。また、「戦争が」の俳句の認知度、受容度が高まったのは、神田秀夫、大岡信の読み解きに負うことを引いて、川名大自身も新たな読み解きを試みている。

〈街燈は夜霧にぬれるためにある〉(鶏たちにカンナは見えぬかもしれぬ)〈谷底の空なき水の秋の暮〉など、白泉の百句を丁寧に読み解き、作品の本質に迫る。川名大によれば、「白泉の俳句と生涯を端的に言えば、人間存在の根底に触れるような深い孤独感と憂愁感を伏流させながら、新しい多様な表現形式や文体を次々と創り出していった多面体だった、といえよう。」

【新しい風】 神奈川の若手俳人

(第一回) 金子 泉美

「うかうかと」

うかうかと曲がつてしまう花迷路
お隣にアスパラガスのような嫁
引き算を重ねね香水選びけり
生身魂父が半分透けている
天高し私にゼロが満ちてくる
秋風とわが魂が行方不明
男などまた生えてくる茸狩
帰れないみんなを癒やす聖樹の灯
温室を出る日たくさんのありがとう
葱坊主生きてるだけで丸もうけ

神奈川県出身。学生俳句協会大会一般の部への投句がきっかけで、平成11年に現代俳句協会入会。

『吟遊』を経て、今は『祭演』同人、川柳誌『触光』誌友。創作と批評は車の両輪、誌上句会の選評作成が楽しみです。

もともと体が弱く、集団に馴染めなかった。本を読むことで世の中を知り、世界とつながっているところがありました。

10代の頃から俳句の短さには魅力を感じ、時々創作。17音に喜び、皮肉、怒りやユーモアなどを込めて手放し、心身のバランスを保っていたのかもしれない。

現在40代。自身と親の病を抱え、また大きすぎる小型犬2頭を預かり、人生の秋を迎えた感が……。なかなかリアル句会に出る機会を作れませんが、これからも俳句と、社会と関わり続けて行きたいです。



右 『渡邊白泉の100句を読む』 川名 大 (飯塚書店)
中央 『季々の滴』 松本隆男 (一粒書房)
左 『俳句の岸辺』 佃 悦夫 (小田原俳句協会刊行)

II 地区動向・消息 II

1. 9月13日(月) 副会長会議中止
2. 9月13日(月) 部長会議中止
3. 9月13日(月) 実行委員会中止
4. 11月22日(月) 第38回俳句大会中止
募集句については予定通り選句、賞の決定、作品集の作成を行ない、表彰状、副賞は作品集と一緒に送付、会報にて顕彰結果をお知らせする。
5. 会員動静(令和3年11月20日現在)
加藤 三眠 秦野市南が丘(地区内移転)
野木霞丘子 横浜市南区(地区内移転)
篠原あい子 国立市(東京多摩地区より転入)
平山 圭子 藤沢市(岐阜県より転入)
黒岩 徳将 鎌倉市(東京都より転入)
6. 逝去謹悼
川名 将義 横浜市 令和3年5月
原 あや 鎌倉市 令和3年10月
川辺 幸一 川崎市 令和3年10月

【編集後記】

★ワクチン接種がすすみ、コロナもようやく落ち着いてきたようです。句会や吟行に出掛けられる日々が戻ったこと、まさに「快なり」です。これからも油断することなく、手洗いマスクを守っていきたいものです。(栄子・泰子)

★今号より新コーナー「神奈川の若手俳人、新しい風」が始まりました。題詠「花の一句」は今号をもちまして終了いたします。次号では「春の一句」を特集します(締切：2月20日、葉書またはEメールで編集人まで)。ご投句お待ちしております。(美春)

ねんりんピックかながわ2022
主催 厚生労働省・神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市・一般財団法人長寿社会開発センター
共催 スポーツ庁
テーマ 神奈川に 咲かせ長寿の いい笑顔
未病改善でスマイル100歳
会期 令和4年11月12日(土)～15日(火)
俳句交流大会 令和4年11月13日(日)
大会会場 湯河原町町民体育館
吟行地 万葉公園、五所神社(会場と吟行地の無料循環バスあり)
参加費 無料
募集句応募 令和4年4月1日～5月末
(投句料無料) 応募用紙は3月の会報に同封予定

発行所 神奈川県現代俳句協会
発行人 尾崎 竹詩
編集人 杉 美春
〒252-0325
相模原市南区新磯野4-4-1-506
電話・FAX 046(252)2729
Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp
印刷所 (有)湘南グッド

